

創造力の根っこ

「何かが降りてきて語ったメロディ」音楽のデザイン(続々) [普遍的常識]

何かが降りてきて「語った」メロディ、
魂をふるわす「文字にはならない言葉」としてのメロディ

メロディは『魂』をふるわせ、共鳴させてくれる「文字にならない言葉」です。
それは「感性による」と表現してよいと思います。
デザインで重要な「感性」、広義の意味でデザインはあらゆる場面で使われ、音楽することも感性からのデザインだと言えます。
さらには「人生をデザインする」、言い方もできるわけです。

音楽でのデザインは「作曲」が根っこにあって、伝達者、伝導者としてのパフォーマーによって、我々に「感動」エネルギーを伝えてくれています。
ライブに参加すれば会場を伝わる波動がうねりとなって『魂』を揺さぶります。
ジャンルにこだわらず、それぞれの人の『魂』に響く音色や音楽は異なっても名曲としての法則は「調和」「発展進歩」されていなければ『魂』を揺さぶるまでにはなりません。
受信するオーディエンスの「感性」はシンクロする周波数に自然にチューニングされるのです。

普段の生活の中で、突然美しいメロディが飛び込んできて「感動した」瞬間を味わった経験があると思います。
それは頭で受信して理解しているのではなくセンサーである耳を通して直接『魂』に飛び込んできた瞬間に、ハッとして音楽を認識するのだと思います。
音楽、デザインは理屈ではなく「感性」の問題であるといわれる所以です。

「感動」エネルギーの化学変化は「アート」と同じで、『魂』への響き無しには語れません。

「感動」により共鳴した波動は、語り継ぐように、打ち寄せる波のように繰り返し『魂』を揺さぶり、パフォーマーからオーディエンスへ、インフルエンスする過程において『魂』が自然に結びつき、一体感、連帯感を助長させてくれるのも、それぞれの「感性」が結びついた、「感動」の連鎖といえます。

「感性」は『魂』を外に向けて素直に扉を「解放」している状態の感覚を意味していると思います。そこに内なる「感性」「発意」によってデザインの基礎条件である普遍的常識が整ったことになるのではないのでしょうか。

日本を代表するエポックメイキングな加藤和彦が、この世を去りました。
ザ・フォーク・クルセイダーズ時代からの偉大な活躍と業績は語りつくせないものがあります。
残念です。

日本のシンガーソングライターの先駆者と言っても過言ではないと思います。

それぞれの時代に、エポックメイキングな音楽家が輩出されているのは人類全体をデザインする「何か」の力によって作用されているように思えます。

音楽全体の大きな潮流としてみるならばクラシック音楽では19世紀のリヒャルト・ワグナーが彼の音楽以前以後で、その業界に与えた影響は、インパクトは文化全体にまで響き渡りました。

20世紀の60年代くらいまではデューク・エリントンを中心にジャズがそれに変わる世界的な現象として位置付けられ、60年代以降はビートルズを含めたロックな時代だったと回想できます。

21世紀の潮流は何になるのか楽しみです。

日本において応用から育ったアニメやゲームの音楽が、映画音楽と同じように世界に愛される21世紀の音楽になる日が近いと予感します。

世界中でテレビ放映されているアニメの70%近くは日本製で、世界の子供達が日本製アニメを観て刷り込まれるように、すべてではないにしても主題曲も同じように放送されていれば自然に、母の子守唄と同じように美しいメロディが脳裏に焼きつき「脳」を通して「心」「魂」をふるわせてくれると感じるからです。

理屈ではなく「感性」です、原理原則の根っこであり音楽の三要素である「リズム・メロディ・ハーモニー」と人生論としての「易学: 不易、易、発展進歩」に通ずる普遍的常識を実践することで「メロディ」がその時代を映す鏡となります。

「官」の造った歴史ではなく、音楽史ではなく、世界規模で人々に愛される「文字にならない言葉」であるメロディが連綿と受け継がれてこそ、『魂』と『魂』が連帯感で結ばれ、潮流になり、メインストリームになっていくと感じるのです。

人類全体をデザインする「何か」とは、人々の中に存在する『魂』からの波動が融合され大きなうねりとなり、そのエネルギーの跳ね返りが「言葉を超えた意思疎通」と同じように、目には見えない超大なエネルギーであると想います。

それを人は「神」と言うかもしれません。

作曲家もパフォーマーもオーディエンスも、すべて「人間」ですから『魂』の扉を解放した状態である「感性」を、この21世紀にチューニングすることで、たった一人の人間が技術・スキルを別にすれば作曲家、パフォーマー、オーディエンスとしてなりえるのです。

またそうでなければ、それぞれの時代のエポックメイキングな音楽・メロディは何か降りてきて多くの人々の『魂』をふるわすものにはならないのです。

音楽における普遍的常識の「感性」も、デザインの根っこにある『魂』の扉を解放した状態に自身をチューニングすることが大切です。

キーワードは「正直」「素直」がヒントになるのではないのでしょうか。